

書評

片桐恵子 著

『「サードエイジ」をどう生きるか：シニアと拓く高齢先端社会』

(東京大学出版会, 2017年)

斎藤 民*

Ⅰ はじめに

中高齢期に関心のある人、研究対象としている人は「サードエイジ」という言葉に少なからずなじみがあるのではないだろうか。本書の第1章において紹介されているLaslett (1987)は、人生を年齢ではなくその発達段階に応じて4つに区分している。このうちサードエイジは個人的な達成と実現の時期にあたり、著者はこれを「現役世代の後半から仕事を引退してのち、身体にいろいろ支障が出る前」と位置付けている。著者は前著『退職シニアと社会参加』(2012)をはじめ、これまで退職期の中高齢者(本書に倣い、以降は退職シニアとする)の社会とのかかわり方(こちらも本書に倣い、以降は市民参画とする)について社会心理学の立場から研究を続けてきた。本書はその集大成といえる。

サードエイジの市民参画を考えることが重要な理由はいくつかある。一つは、長時間労働が課題となっている我が国では、働きざかり(セカンドエイジ)世代の就労以外への参画促進が進まず、比較的時間に余裕がある退職シニアに活躍を期待する声大きい点である。数十年前には高齢者のあるべき生き方として、可能な限り中年期と同等の役割を果たし続けるのをよしとする活動理論と、そうした役割から解放されるのをよしとする離脱理論との間で議論があったように、高齢者の活動参加に対する見解は定まっていなかった。しかしその後急速に人口高齢化が進捗し、少なくと

も現在、社会の側では「シニアに活躍してもらわなければ地域社会が成り立たない」と認識されるまでに変わってきている。

もう一つの点は、サードエイジの暮らし方がその後のフォースエイジ(身体機能に支障を生じてから人生の終末期に該当する部分)のあり方を左右する点である。本書でも述べられているように、高齢者の市民参画により将来の生活の質や健康度を維持しやすい可能性が国内外の研究から明らかになっている。今後日本では後期高齢者の急増に伴い、虚弱(フレイル)や認知症のある高齢者が増加することが予想されており、予防がますます重視されている。しかし心身の健康が低下してから地域の介護予防教室やサロンに通いだすのはなかなかハードルが高いことである。むしろ元気なうちから社会と多様なつながりを持ち、可能な限りこれを維持しつづけることが健康づくりに重要となる。私自身はどちらかといえばフォースエイジの心身の健康に着目して研究することが多いが、彼らの現在の生活を切り取るだけでは問題解決に不十分だと感じることが多い。フォースエイジの人々のケアや健康維持を図るうえで、これまでの生き方、すなわちサードエイジやそれ以前の暮らしぶりを理解することは重要である。こうした個人的な問題意識もあり、サードエイジの市民参画を取り上げた本書を大変興味深く拝見した。

* 国立長寿医療研究センター老年社会科学研究部 部長

Ⅱ 本書の紹介

本書は前著「退職シニアと社会参加」(2012)を踏まえた発展版として著された。前著では社会参加活動に焦点を絞っているのに対し、本書では退職シニアの社会とのかかわり方の選択肢に新たに「就労など生産的活動」「市民活動」を加え「市民参画活動」と総称し、これらへの参加の現状や活動に参加する意義とその効用を述べている。

次に各章についてごく簡単に紹介する。第1章では前著『退職シニアと社会参加』(2012)において論じた内容を紹介するとともに、社会状況の変化(人口構造の変化、高齢者雇用安定法の施行、貧富の差の拡大)から、退職シニアの活動の選択肢として就労など生産的活動にも目を向ける意義を、またこれまで論じられることの少なかった市民参加活動(市民活動や政治活動、NPO活動など)等、多様な形態の活動を取り上げる意義を述べている。

第2章では、第1章で提起した意義をもとに、社会参加活動、生産的活動、および市民参加活動に参加する割合の経時変化や他国との比較結果について、著者の調査研究や官庁統計などによる豊富な資料とともに示している。また本章では、生活のために働かざるを得ない低所得高齢者に代表される「不安定なエイジング」について触れられている。

第3章では、市民参画活動の選択をする際に求められる、現役時代とは異なる人との付き合い方や知識・能力を身につけうる場として生涯学習、地域のグループ活動、企業の社会的責任(CSR)活動を紹介している。また本章では、これらとソーシャル・キャピタル(本書では、アメリカの政治学者Putnamによる定義を使用:ある集団内での社会関係から醸成された集団特性であり、その集団を発展させる資源として利用しうるもの)との関連に触れ、活動参加がソーシャル・キャピタル醸成につながる可能性とともに、地域のソーシャル・キャピタルが企業のCSR活動を促し、従業員の市民度を高める可能性についても指摘して

いる。

第4章では、シニアの継続就労や転職、起業におけるシステムや支援機関の不足と、それに対する政府の取組みを紹介し、システム整備や働き方改革などとともに企業や高齢者自身の意識改革が生涯活躍社会に重要であることを指摘している。一方では継続就労に代わる生き方として、NPOでの有償労働やボランティア活動への参加にも触れ、シニアが社会の担い手として多岐に活躍しうることが述べられている。

第5章では、これまでに紹介した諸活動がいずれもシニアの健康に良好な影響を及ぼしうることを示すとともに、生涯発達の観点では、活動参加により技術や経験を次の世代に伝える「世代性」や普遍的な知恵を示す「英知」が獲得される可能性を指摘している。最後にシニアの市民参画が今後の超高齢化社会の成熟に寄与しうることを述べ本書を結んでいる。

Ⅲ 本書の特徴

ここからは本書の特徴を述べたいと思う。まず本書は平易な言葉を用い、一般の方や老年学を学ぶ学生などの初学者にもわかりやすく書かれている。また著者の長年の成果を紹介しつつ、豊富なデータの裏付けに基づいており、説得力もあるといえる。本書は単にシニアの活動実態やその個人への効果の解説に留まらず、彼らの活動参加が社会に及ぼしうるインパクトに触れている点も注目すべき特徴である。特にこれまで日本ではほとんど取り上げられてこなかった市民活動を高齢者の市民参画活動の一つと位置付け、政治学の観点から公共性や民主主義との関連に踏み込んで議論した点は非常にユニークと言える。本書により、今後社会老年学の領域においてシニアの市民活動に関する研究関心が高まることが期待される。もう1点、本書の賞賛すべき特徴を申し上げたい。著者も述べている通り、シニアの活動参加に関しては、類似する、しかし完全には一致しない数多くの用語が用いられている。社会活動、生涯学習、生産的活動、市民活動等である。これらの用語の

曖昧さはそれを専門に研究する研究者でさえも非常に頭を悩ませるものである。本著では、用語の曖昧さの限界には触れつつも、各活動の定義を丁寧に行い、これらの概念関係を図示し、すべてを包含する市民参画モデルを提唱している。これだけでも非常な労作であると言え、初学者のみならず多くの研究者に参考となることが期待される。

以上のように、本書は多岐にわたるシニアの活動をモデル化し、非常に学際的な視点からわかりやすく述べており、著者の見識の広さをうかがわせる。我が国でも近年いくつかの大学で老年学（ジェロントロジー）の研究科や講座が開設され、広い学際性をもって老年学を学ぶ機会を提供している。本書はシニアの活動参加という観点から老年学を学ぶ教科書としても優れたものであるといえる。

一方、本書のこうした学際性やわかりやすさは著者の狙いであると拝察するものの、それが諸刃の剣となり、シニアの市民参画の促進/停滞にかかわると考えられるいくつかの要因についての掘り下げに物足りなさを感じた。第1に、サードエイジ以前を含むライフコースの観点である。著者は本書において、一貫してシニアの活動参加を促進する重要性を説いている。また活動参加を促進するためのスキルを醸成する機会や、シニアの活動参加促進に向けた政策動向を示している。しかし著者も指摘するように、現状では現役時代に市民参画を意識する人は多いとはいえ、仮に現役時代から市民参画を意識してきたとしても、退職を機に実際に市民参画できる人は一部にすぎない。特に前者の意識を変えることなしには、根本的なシニアの社会参画促進は成し遂げられないのではないだろうか。

本書はサードエイジのシニア本人に加え、現役世代をも読者として想定しているとある。実際に若い世代に向けたメッセージとして、企業のCSR活動を通じた現役世代における市民意識の向上の可能性や、働き方改革・労働者自身の生き方についての意識改革の必要性を論じている。このような観点は私を含めた現役世代にとってもなるほどと思わせるものである。一方、現役世代の活動経

験や意識とシニアの市民参画との関連を示すデータはほとんど紹介されていない。残念なことに若い頃の意識や習慣とシニア期の市民参画との関連を実証するような数十年規模の縦断研究はほとんどみられないが、それでもいくつかの傍証は可能であろうと考える。例えば私自身は数年前、都市と農村の社会活動参加割合の差を検証し（斎藤他, 2015）、農村地域では大都市地域と比較して町内会や老人クラブへの参加率が高いことを示した。一般に、農村部では地区の祭り、青年会、同年会など、地縁を基盤とする多様な組織が都市部よりも多く残されている。ファーストエイジ、セカンドエイジにおける参加の地域比較と重ね合わせることで、サードエイジの市民参画がどのように形成されるかを推察することが可能であろう。同様に、国際比較も役立つであろう。本書ではいくつかの国際比較がなされているが、そのほとんどはシニアの活動実態の比較に留まっている。しかし活動割合の高い国で参加がどう根付くのかをライフコースの視点から論じることにより、社会文化的な差異はあるにせよ、日本のシニアの活動促進に有用なヒントが得られるかもしれない。例えば米国では、教会を主体としたボランティア活動が盛んであるが、それはシニアに限らず子どもの頃から根付いている。また子どもの頃から社会貢献活動などの課外活動への参加が推奨され、進学の際の評価基準のひとつとしても扱われている。

他方、日本は近年数々の大規模自然災害に見舞われたが、災害ボランティア活動の機運は高まっており、多くの若者が災害ボランティア活動に参加している。また育児に積極的にかかわる男性やそれに付随してPTAで委員を務める男性も実感としては増えてきている。このような経験がシニア期の活動参加に影響しないとは考えにくく、今後の検証が待たれるところである。

第2の観点として、近年の社会経済格差の拡大を取り上げることができる。日本社会が「一億総中流」と言われていたのは今は昔、今やOECD諸国のなかでも比較的格差の大きい国の一つとなっている。本書でも「不安定なエイジング」という、

社会保障の欠如と低所得が重なった状態が紹介されている。非正規雇用者が増加する日本では、将来的にこうしたシニアの増加が予想され、生きがいや自己実現よりも生活のために就労を選択せざるを得ない者が主流になる可能性も否定できない。本書では種々の市民参画活動が及ぼす健康への良好な影響が紹介されていたが、こうした「せざるを得ない」就労が自己実現のための就労と同様に健康度を高めるのかどうかは検証の必要があるだろう。

またこうした社会経済格差が大きな地域ほど、ソーシャル・キャピタルが低いという米国の知見がある [Kawachi et al. (1997)]。本書ではシニアの市民参画による地域のソーシャル・キャピタル醸成の可能性が述べられているが、社会経済格差の拡大がシニアの市民参画やソーシャル・キャピタルにもたらす影響を明らかにすることが望まれる。

一方では、ソーシャル・キャピタルが豊かだと、社会経済格差の健康への悪影響が緩和されるという報告もある [Haseda et al. (2018)]。格差対策の言い訳になってはいけませんが、「不安定なエイジング」におかれた人でも、就労だけでなく自らの望む活動を選び参画できるシステムをつくるのが(非常に難しいことだが)、豊かな社会を守る一助となるかもしれない。

Ⅳ おわりに

市民参画活動の体系的な枠組みを示し、参加の現状、これから取りうる参加の選択肢とそのメ

リットを具体的にわかりやすく述べた本書は、退職シニアの市民参画やこれを支援する地域、関係者を応援する良書といえる。

またシニア「が」ではなくシニア「と」拓く高齢先端社会という副題から、シニアと若い世代が支え合いながら超高齢社会を豊かにしてほしいとの著者のメッセージを読み取ることができる。介護保険制度における地域包括ケア構想のなかで、住民参加による介護予防の重要性が指摘されたが、現在ではさらに発展して、子どもから高齢者まで多様な世代の参画による地域共生社会の実現が目指されるようになった。多様な世代、立場の人々が本書に触れ、市民参画を通じた豊かな社会を考えるきっかけになればと思う。

参考文献

- Haseda M, Kondo N, Ashida T, Tani Y, Takagi D, Kondo K (2018) “K5.Community Social Capital, Built Environment, and Income-Based Inequality in Depressive Symptoms Among Older People in Japan: An Ecological Study From the JAGES Project,” *Journal of Epidemiol*, 28 (3), pp.108-116.
- Kawachi I, Kennedy BP, Lochner K, Prothrow-Stith D (1997) “Social capital, income inequality, and Mortality,”. *American Journal of Public Health*, Vol.87, pp.1491-1498.
- 斎藤民・近藤克則・村田千代栄・鄭丞媛・鈴木佳代・近藤尚己・JAGESグループ (2015) 「高齢者の外出行動と社会的・余暇的活動における性差と地域差：JAGESプロジェクトから」『日本公衆衛生雑誌』, Vol.62, pp.596-608.

(さいとう・たみ)